



130号

2008/ 1 / 1

日中文化交流市民サークル「わんりい」  
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>  
Eメール: [wanli@jcom.home.ne.jp](mailto:wanli@jcom.home.ne.jp)



新年明けましておめでとうございます  
2008年1月1日

家族でお寺に参拝

2004年8月 四川省甘孜チベット自治州理塘県曲登にて

撮影：鈴木晋作

「わんりい」130号の主な目次

北京雑感その(21)「北京人のお行儀」	2
私の調べた四字熟語(19)「 <small>けいこうぎゅうご</small> 鶏口午後」	3
ものしりノート(4)「うだつ」について	4
中国を読む(48)「平山郁夫画文集・西から東にかけて」	5
四姑娘山写真だより⑦「黄山霧幻」	6
私の四川省一人旅(13)	8
もう一つの韓国・ドラマを支える島の魅力(済州島①)	10
スリランカ紹介(15)「バス旅行ー第3話」	11
大連だより・日本語教師雑記②	12
曲登(中国四川省チベット高原)再訪記	14
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より	16
アフリカとの出会い(22)「ジャムフリ・デイ」	16
【活動報告】「わんりい」15周年記念コンサート	17
「わんりい」掲示板	18

♪「中国語で歌おう!会」・1月の歌♪

「昴-すばる」(谷村新司 作詞作曲)

昨年、6月・7月に指導いただいた「昴」ですが、新年会で歌います。復習を兼ねてもう一度、ご指導を頂きましょう。新年会ご参加の皆様、一緒に練習してみませんか。中国語訳の歌詞を18ページに掲載しました。

▶ 於：まちだ中央公民館7F・第一音楽室 ◀

JR横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分町田東急裏109ファッションビル7F

1月18日(金) 19:00 ~ 20:30

2月15日(金) 19:00 ~ 20:30

指導：趙鳳英zhào fèng yīng 録音機をお持ち下さい。

●「中国で歌おう!会」於：まちだ中央公民館

毎月1回、主として第3金曜日開催(変更もあります)

19:00 ~ 20:30 会費(月1回):1,500円 体験無料

\*初めてご参加の方は、会場、日時など「わんりい」事務局へお問合せ下さい。

 バスに乗ると

北京オリンピック開催に当たっての、北京政府の心配事の一つが、北京の人々のお行儀だと言われています。

確かに、北京の人々のお行儀は、全般的に、あまり良いとは言えません。よく見られるのは、バスに乗る時、並ばずに我先に乗り込む光景です。

国慶節に、前門から清華大学までバスで行く時、やっと見つけたバス停で、かなり混んだバスが出発するところだったので、次のバスにしようと、一番前に並んだ積りでしたが、時間が経つにつれて周りに人が集まって、行列ではなく、人の塊ができました。暫くすると、待っていた路線のバスが来て、乗客を降ろしました。前門が始発なので、乗って来た人々は皆降りました。そのまま乗り場に来るのかと思ったのに、10メートル程手前で停まって時間調整をしています。

北京のバス停には時刻表がありません。同じ路線のバスが3,4台続けて来たかと思うと、20分程も間があくこともあります。前に混んだバスがいて、乗り降りに時間がかかっていると、後から来たバスが前のバスを追い越して行きます。そんなバスが、目の前で時間調整らしきことしているので、周りの人達もかなりイライラして、いつになったらここへ来るのだろうと待ち構えています。そのうちに、4,5人のグループがそのバスのところへ行って、運転手に二言三言話すと、バスに乗り込んでしまいました。それを見ていた人達が後に続こうとすると、運転手はここでは乗れないと言ったようですが、皆、無視して乗り始めました。すると運転手はバスのドアを閉めてしまいました。

4,5分後、そのバスは、首尾よく先に乗った人達を乗せたままバス停にやって来ました。すると、人の塊がバスの乗り口に殺到し、押し合いへし合いして、なかなか乗れません。並んだ方がずっとスムーズに乗れると思うのですが、誰も譲ろうとしないので、時間ばかりかかります。私はと言えば、乗り場の前の方にいた筈なのに、人の塊の後ろでウロウロしていました。バスには既に多くの人に乗っていて、もう少しで満員になりそうです。私は前のバスが出発した時から待っていたのだから、これに乗れなくては大変と思い、人ごみの中に体をいれ、一緒に押し合いへし合いすると、どうにかバスのステップまでたどり着き、やっとの思いで乗り込むことが出来ました。私の後、10人位乗ったところで、どうにも乗れなくなり、まだ乗ろうとする人が大勢いましたが、運転手さんがやっとドアを開けて、出発しました。

バスの中は、ラッシュアワーの電車のように、身動きが出来ません。北京のバスは、掴まるところが少なく

困るのですが、人が多くて倒れる心配が無いだけ楽でした。人の間であちに揺られ、こっちに振られしていると車掌さんの近くまで押されて行きました。車掌さんが近くのポールに掴まらせてくれて、「ここに掴まっています。この人達は西単商場で降りるから、その後ここに座ればいから。」と言ってくれました。すると、「この人達」と言われた中の若者が一人、席を譲ってくれました。「せっかく座ったのに申し訳ない。あなた方が降りた後で座らせて貰うから…」と辞退したのですが、「没事。別客气。」と引っ張ってくれるので、有難く座らせて頂きました。

西単商場は、通常、長安街の西単バス停の次で、時間にして4,5分ですが、国慶節のこの日は、西単には停まらず、出発したら次が西単商場でした。しかし、この日は天安門広場周辺が交通規制され、車も多いので、交通渋滞が発生して、バスは遅々として進まず、たった一区間を走るのに40分もかかってしまいました。その間、私は、席を譲ってくださった若者に対して、本当に申し訳ない気持ちで座っていました。

北京でバスに乗ると、8割方、席を譲って貰えます。老人が乗ってくると、若者がサッと席を立て、何気ない様子で席を譲ります。偶に、すぐ譲られることが無い時でも、車掌さんが席を譲るよう声をかけると、すぐ応じてくれます。空いているバスで、若者にも車掌さんにも気がつかれずに立っていることは、殆ど皆無と言って良いと思います。ある時などは、運転手さんの後ろに良い場所を見つけて、景色も良く見えるので、立っていたのですが、運転手さんが大声で、後の車掌さんに“席を空けてやって”と指示して、座らされてしまいました。

北京のバスは、新しく導入されたバスは別にして、全体に吊革が高く、掴まるところが少なく、老人には不便です。しかも、運転が荒くて、急ブレーキ、急発進が多いので、しっかり掴まっても、老人はバスの中で走ったり転んだりしかねません。確かに、老人には座っていて貰う方が安全でしょう。老人に席を譲ることは、安全のために必要で始めた事かも知れませんが、席を譲る若者のマナーはスマートで、これが、乗るときに押し合いへし合いする同じ中国人かと思ってしまう。

先日、東京で電車に乗ったら、優先席に若者が3人だらしく座って、携帯を見せ合ったり、スナック菓子を食べたりして、傍に杖をついた老人がいても知らん顔を決め込んでいました。何だか北京のバスが無性に懐かしくなりました。



時に次のような会話を耳にします。  
 「君はこんな大企業の一社員として、自分を殺して毎日悶々としながら働くよりも、いつそ小さな会社でも経営して、自分のやりたいようにやった方がいいじゃないか、鶏口牛後ともいうよ。」

「そうだな、大会社で歯車のひとつになっているよりは、小さな会社でも起こして、そこでのびのびと働いた方がやりがいもあるかもしれないな。」

鶏口牛後は、辞書ではどのように説明されているのでしょうか。

三省堂 現代国語辞典 には  
 “鶏口牛後”の四字熟語としては出てきませんでしたが、“鶏口”の説明の中で、「鶏口となるも牛後となるなか

れ」大きな団体の低い地位にいるよりは、小さな団体でもそのかしらになったほうがよい。と載っていました。

小学館 中日辞典 では  
 「鸡口牛后 jikōuniúhòu 鶏口となるも牛後となるなかれ。大きな団体で末端に位置するよりも、小さな団体でもその長となったほうがよい。」と説明されていました。

出典は、中国の歴史書「十八史略」(脚注)です。

中国の戦国時代、秦、楚、齊、燕、韓、魏、趙の7つの強国が覇を争っていました。(右上図 参照) 最強国は秦で、他の六国は秦と同盟するか戦うかが国の存亡の大選択であったのです。秦は諸侯を、武力を背景に威し、領土の割譲を求めていました。

洛陽の人に蘇秦という遊説家(脚注)がいました。蘇秦は、最初秦に他の六国と同盟を結ぶ連衡策を説いたのですが、外国人排斥意識の強かった秦には採用されませんでした。

そこで燕の文侯のところへ赴き、趙と南北に同盟させようとして、連衡策とは正反対の合従策を説きました。燕は蘇秦に遊説資金を与え、それで趙に行かせました。蘇秦は趙の大王の肅侯にこう説きました。

「諸侯の兵力を合わせれば、それは秦の兵力の十倍に値します。力を合わせて、西方の秦を攻撃すれば、秦は必ず敗北するでしょう。大王の為に愚考しますところ、六ヶ国が南北に同盟し、秦を排斥するよりよい方法はありません。」

そこで、肅侯は蘇秦に遊説資金を与えて諸侯と同



盟を結ばせようとしてしました。蘇秦は世間によく言われている諺を使って、このように諸侯に説きました、「小さな国の国王(鶏口)になっても、大きな国(秦)に従属(牛後)してはなりません。」かくして、南北六国の同盟が成立したのです。

その時に使った諺が「鶏口牛後」(脚注)でした。小国の国王の自尊心を旨くすぐった弁舌であったのです。蘇秦は、ついに六国の宰相になりました。

〈注記〉

十八史略: 『十八史略』(じゅうはっしりやく) は元の曾先之によってまとめられた歴史書。三皇五帝の伝説時代から南宋滅亡までの歴史を編年体で記述。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

遊説家: 意見や政策を各国に説いて回る人。

鶏口牛後: 「十八史略」の中に、「寧為鶏口、無為牛後」(むしろ鶏口と為るとも牛後と為る無かれ)の文章が見られる。「鶏口」は鶏のくちばしのこと、弱小なものの頭のたとえ。「牛後」は牛の尻で、強大なものの末端を指す。

【‘わりい’の原稿を募集しています】

‘わりい’は、‘わりい’の会員と関係者の皆さんから寄せられた原稿でまとめられています。

‘わりい’の頭には日中の冠を載せていますが、中国に限らず各地(主としてアジア)で体験された楽しい話、見聞した面白い話、美味しくて珍しい食べ物の話などなど、気楽にお寄せいただいているいろいろな角度から諸国の文化に触れてみたいと思います。

紙面が16Pと限られていますので、掲載まで暫くお待ち頂くことがあります。また、紙面の都合で作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもありますのであらかじめご了承下さい。

尚、原稿の締め切りは20日ということにしていますが、編集の都合上、早めに頂ければ有難いです。(田井)

## もの知りノート(4) 「うだつ」について

岡村景孝

‘うだつ’があがらないなどよく言われますが「うだつ」とはなんだろうという疑問がありました。また中国でも特に昔の呉の国の地域では防火壁として「うだつ」が見受けられます。やはり中国から導入されたもののように思われました。以下調べた範囲で述べてみましょう。

### 1、うだつ(卯建)とは

「うだつが上がらない」という言葉に使われている「うだつ」とは何でしょうか？うだつが上がらないとは、出世したり地位が上がらない、経済的など環境に恵まれないという意味でよく使われますね。

うだつの語源にはいくつか説があります。

- (1) 柱の上にある屋根を支えるための横木(はり)と屋根の骨組みの一番高いところに使う木材(むなぎ)の間に立てる柱を「うだつ」という説。柱のうだつが上げられない、またはうだつのない家に住んでいるという意味からという説です。
- (2) 掘り井戸など周囲を石で積み上げる際、一番下の土台として組む枠をうだつといい、年中下積みになっていることに由来するという説。
- (3) 隣家との境につける防火壁「うだち」がある家は裕福とみられたことから、「うだち」が変じて「うだつ」になったという説。建物の飾りとしての意味合いももっているようです。

現在うだつとして一般的に使われているのは(3)の隣家との防火壁だと思われます。

### 2、中国で見かけた隣家との防火壁

上海および周辺の水郷地区ではこの防火壁(日本でいう「うだつ」)が数多く見受けられます。

上海の北に位置する蘇州は呉越時代(BC5世紀)および三国時代(3世紀)の呉の都だったところで、地理的にも日本に近いところから中国の様々な文化が呉の地域から、また呉の地域を通じて日本に伝来してきました。文字、思想、宗教、習慣、暦、蚕、水稻、鋳鉄・建築・薬・医療など様々な技術が挙げられます。例えば日本ではいまだに和服のことを呉服と呼んでいるのも当時の名残でしょう。

「うだつ」について記載された辞典などの文献には中国からの伝来であるという記述は一切ありませんが、建



三国時代の242年呉の孫権によって建立された現在の上海西南部にある龍華寺のそばにある「うだつ」中国語では「梲zhuo」というが、うだつがあがらないというような言い回しはない



上海市の北にある水郷の一つ嘉定区の法華塔(1205～1207建立)のそばで見かけたうだつ

築関係でもこの防火壁(うだつ)が中国から伝来してきたのはほぼ間違いないのではないかと考えています。

なお、蘇州、朱家角、周荘や上海の西にある最も至近距離にある水郷・七宝でもうだつを見かけましたし、上海魯迅公園内の魯迅記念館にも立派なうだつがあります。

安徽省徽州地区ではうだつのある美しい街並みが残されており、このあたりでは「馬頭壁」と呼ばれているそうです。防火壁の役割を担っていることには変わりはないようです。

### 3、日本におけるうだつの例

岐阜県美濃市や徳島県美馬市脇町など伝統的な美しいうだつの街並みが保存されています。

参考文献：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』語源由来辞典「うだつ」の項目





岐阜県美濃市のうだつ



徳島県美馬市脇町のうだつのある街並み

## 中国を読む (48)

### 「平山郁夫画文集 西から東にかけて」 平山郁夫著 (中公文庫)



平山郁夫氏は空飛ぶ画家である。そのフィールドの広いこと広いこと。例えば、三蔵法師の仏教伝来の跡を辿る、ヘリコプターで幻の国・楼蘭に降り立つ、日が沈んだイラン・ザグロス山脈の砂漠を駆け抜ける…など

など。日没後、冷え込んだ砂漠では、砂のなかのわずかな水分でさえ凍って輝き出すという…。「さまよえる湖」のヘディン顔負けのアクティブさである。その軌跡の一部を切り取ったのが、この画文集。

空飛ぶ理由は平山氏の絵画テーマ、仏教にある。インドで生まれた仏教は、長い長い旅をして日本まで繋がっている。仏教文化によって生まれた日本美術は、それを伝えた数多くの人々の苦勞があつてこそ生まれた。気の遠くなるようなスケールでアジアの国々は繋がっているのだ。繋がっている細い糸を、平山氏はところどころで手繰り寄せせる。敦煌と法隆寺の壁画が酷似していること(敦煌の壁画に氏は日本美術の源流を感じている)。百済の古い都と奈良の山並みが似ており、当時日本に亡命した百済人が奈良の大和三山を見て望郷の念にかられたであろうこと。中国内陸部で仏教文化を伝える橋渡しとなった遊牧民が松前藩とも交流があった可能性。広く旅をしていると、点と点が線になる瞬間

があるのだろう。線と線は面になっていき、そして物語が生まれる。

物語は絵画という形をとり表現される。おそらく平山氏は、土着の人間を描くときは、モデルの人生に思いを馳せ、物語を紡ぎだすように絵画を生み出すのではないか。シルクロードの風景を描くときは、数百年、数千年前にそこを通つたであろう人々を感じながら筆を動かすのではないか。だから氏の絵画は、鑑賞していると絵のなかに入り込んでしまうような錯覚に陥るのではないか。というのはすべて、素人な私の勝手な妄想だけれども…。ちなみに空飛ぶ「わりい」会員は、この画文集のなかに行つたことのある地域を見つけることができるはず。絵画で切り取られた「知っているはず」の一風景をぜひ探してみてください。(真中智子)

‘わりい’の会員になりませんか

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わりい’

‘わりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催しています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わりい’を発行しています。

入会はいつでも歓迎しています。会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。

活動の様子は、おたより又は‘わりい’HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100 (事務局)

私は中国へ数多く旅行して今では住み着いていますが、興味の対象はヒマラヤとチベット文化に限られています。

しかし例外が一つだけ有り、それが黄山の墨絵の世界でした。1988年から1997年まで何度も通い、重い6・7版のカメラや望遠レンズそれに三脚を担いで上り下りの多い黄山を撮影して廻りました。

その写真の一部は四姑娘山HPの「世界の感動的風景」で紹介していますが、今回は解説を加えてご紹介します。

### 五岳归来不看山。黄山归来不看岳。

これは明代の旅行家 徐弘祖が日記に書いた言葉で、黄山を見たら有名な五岳(泰山、華山、高山、恒山、衡山)さえも見るに値しなくなると言っています。

黄山は、真に仙境のような水墨画の世界を見せてくれる名山です。世界遺産にも指定されている黄山は、上海の北西

300km位、下流に近い長江の南に在る石灰岩の山塊で、河南に降る豊富な雨に侵食されて数多くの急峻な岩峰を形成しています。

岩峰群の高さは1500～1900mで、名前が付けられている岩峰だけで72峰あります。

谷から湧き上がった雲霧がこれらの岩峰を見え隠れさせて千変万化の景色を見せてくれます。黄山に生える松は

特に黄山松と呼ばれています。黄山松は石灰岩に出来た細い溝や小さい空洞に根を張っているのも非常に成長が遅く、加えて夏は40℃、冬は-20℃近くになる過酷な気象条件のために、箱庭で珍重されるような特異な形をしています。

この黄山松の煤から作られる墨は最高だと言われ、近くで作られている硯、紙、筆と共に安徽(省)の文房四宝として有名だそうです。

黄山へのアプローチは、1988年頃に較べると随分楽になっています。成田を朝出発する航空便を使えば、上海で車に乗り換えて、その日の夜遅く黄山の麓に着けます。また、上海から夜行列車を使って翌朝早く屯溪に着き、屯溪から車を2時間走らせれば9時頃に黄山の麓に着けます。

黄山の北／東／西麓から頂上まで10分で行けるロープウェイもあります。頂上の宿も随分良くなっています。多くの宿がありますが、景色の良い所に近い北海賓館がおすすめです。

季節としては一般に春や秋が良いとされていますが、私は雪の降る冬が好きです。



写真1 雲の中で見え隠れする峰々。初めて黄山に行った時に見た墨絵の世界でした。



緑の松や黒い岩峰と雪のコントラストに雲霧がたな引く姿は、黄山で見られる最高の景色の一つだからです。また朝夕の景色も格別です。季節毎に日の出や日の入りの前景になる黄山の岩峰や遠くの山並みが変わるので、何時見ても飽きません。

も飽きません。

写真を撮る方には、50～400mmをカバーするレンズと丈夫な三脚を持って行く事をお薦めします。



**写真2** 雲の中の観望台。シルエットで浮かび上がる黄山松とそれに見入る西欧人が印象的でした。



**写真3** 雲海に浮かぶ岩峰の林。黄山松が生える鋭い岩峰が雲に浮かぶ姿が幻想的でした。



**写真4** 北海の日の出。岩峰の向こうから静々と上がって来る赤い太陽が感動的でした。



\*写真日よりNo.⑥は‘わんりい’HPの四姑娘山のコラムに掲載しました。羊満台の威容と美しい高山植物が見られます。



<http://wanli.web.infoseek.co.jp/ookawasan/essay-title.html>

街灯も信号も無ければ、対向車もない。私達を乗せたタクシーは夜明け前の暗闇の中をすべるように走っていた。

昨夜は、早朝の出発に備えて早々に寝床にもぐり込んだのだが、長湯しすぎた温泉の湯あたりか、ついに亜丁に出発できる興奮のためか中々寝付くことができず、一晩中うつらうつらしていただけたような感じだった。みんなも寝起きでまだ眠かったのか、いつも快活なアーロンさえ口数も少なく、私は車に乗り込むとすぐに眠ってしまった。

と、どれだけ走った頃か、かなりのスピードで滑らかに走っていた車が突然ドライバーの急ブレーキでガクンとつんのめるようにスピードを落とし、身体が前に放り出されそうになって飛び起きた。

「ううわわあああ～!! な、何!?!」

もう10年以上前になるが、私は当時滞在していたタイで、自分が乗っていた夜行バスの追突事故に遭遇した事があるのだ。タイ正月の休暇で故郷に帰る現地の友人に連れられて遊びに行った地方都市から、夜を徹してバンコクに向かって走る長距離バスに乗っていた時の事だ。おそらく運転手の居眠り運転が原因ではないかと思われたが、乗客のほとんどが寝入っていた深夜2時頃の事故だったため、とっさに受身を取ることも出来ずに座席の前部に身体を叩き付けられ顔や頭に怪我をした人が大勢いた。

急停車する車の中でその時の記憶が甦り思わず身体を硬くして身構えたが、ガガーンッ!!! という衝撃はおこらずに無事に停車した車のヘッドライトに照らされて浮かびあがったのは真っ黒な水牛だ。「う、牛だあ～!」緊張が緩むとみんな声を上げて笑った。

危機一髪で生命の危険から逃れられたとも知らずに水牛はのんびり道路を横断している。運転手が結構なスピードで運転しているのを、こんな山奥の田舎では交通量が少ないから事故の危険も低いのだろうと思っていたのだが、田舎には田舎の思わぬ危険が潜んでいるものだ。

助手席に座っていたアーロンが、「俺は全然気づかなかったなあ～」と感心すると「俺達は慣れているのさ。安心して任しときなよ」と、ドライバーは陽気に笑った。

ずいぶん走ったような気がしたが、まだ夜は明けてこない。経度の関係で中国の四川省は日本よりかなり日の出が遅いのだ。まだ亜丁には着いていない筈だったが、とある山の中で車が停車した。暫くすると後ろから数台の乗用

車がやって来る。後続車も同じように亜丁に向かう乗客をのせたタクシーだという事だった。

まだ暗い夜道を数台の車は一列になり、何故かヘッドランプを消して月明かりだけをたよりに注意深くそろそろと走りはじめた。

やはり警察の取締りを警戒しているのだろうか。皆の話している中国語の会話がよく判らないため、どうやら私一人だけが状況を把握しておらず、何がどうなっているのかかと思っていると、車が停車して降りるようにと促された。他の車に乗っていた乗客も皆車から降りている。

「え? もう着いたの?」話しかけようとする私を制して、「しっ・・・」とウィンが口にひとさし指を当てた。

車を降りて空を見上げると満点の星が瞬いていた。皆についてしばらく歩いていくと、前方の道路にゲートのようなものが造られているのが見えた。なるほど。そういうことなのか。

つまりこのゲートは亜丁自然保護区の入り口なのだ。本来なら此处で入場料の150円を支払わなければならないのだが、早朝のまだゲートが開く前に暗闇に紛れてこっそり通過してしまおうという訳だ。地元の間人は入場料を払う必要は無いので、タクシードライバー達が空の車を運転して通過するぶんには見つかって問題ないのだろう。車から降りた乗客達は道路を外れると脇の草むらの方に入っていくゲートの脇に建てられた番小屋の裏を抜き足差し足でこっそりと通過する。

中ではゲートの管理人が眠っているのだろうか? なんだか子供の頃のかくれんぼみたいだ。

大の大人達が一列になり皆で息を殺して忍び足で歩いているのが可笑しくて笑いそうになるのをこらえるのが苦しかった。

無事にゲートを裏から通り抜けるのに成功した乗客たちは脇を流れる小川の縁に集まって車がやってくるのを待っていると、丁度夜明けの時間だったらしくさっきまで真っ暗だった空がだんだん白み始めてきた。やけに早い時刻に出発するとは思っていたが、早朝の出発の理由は警察の取り締まりを避けるためだけではなく、入場料の支払いを逃れるためでもあったのだ。きっとこの事は昨日から話題になっていたに違いないのだが、語学力の問題もあり、私は自分に向けられた会話以外は彼らの話を真剣に聞いていなかったため判ってなかったらしい。

タクシーのドライバー達はきっと「俺の車に乗れば入場



料は払わないでもいいようにしてやるよ」などと言って客引きでもしているのだろう。事情はどうあれ、不謹慎だが私は大いに喜んでいて。なんとと言ってもこの先まだ旅の予定は長いのだ。日本円を両替しておくのを忘れたまま四川の奥地までやってきてしまった私は、ピンチのところをギリギリの土壇場で烏里烏沙氏の友人に救ってもらったとはいえ、手持ちの中国元はこの先旅を続けるにはまだ十分とは言えなかった。節約できるにこしたことはないし、国外から遊びに来させて貰っている立場で言うのも何だが、私には中国の観光地における入場料は中国の物価に対して法外ともいえるほど高いように思っていた。

昨日、上海小姐達と昼食を共にした時に聞いたのだが、一般的な中国の会社に勤めるOLの月給は1000元から、やや高くても2000元といったところなのだそう。それが亜丁自然保護区の入場料は150元。四川省きっての観光地、九寨溝にいたっては入場料220元に加え、園内観光に必要なシャトルバスのチケット代が90元である。

勿論、その入場料が環境整備のために使われているのだという理屈は判るが、それにしても大勢の人が訪れる自然公園の入場料が月給の10分の1以上というのはずいぶん高いのではないか。その背景には遊ぶ余裕のある奴らや外国人からは金をむしりとりてやるぞという中国政府の意図が感じられるような気がして、私は少なからず憤っていたのだ。昨今、経済成長著しい中国ではあるが、これでは一般市民にとって旅行というのはまだ贅沢な遊びの部類に入ってしまうのではないだろうか。

そんな事を思っている間に私達の車も無事ゲートを通り過ぎてやってきた。再び車に乗り込むといよいよ本格的に亜丁に向かって出発だ～！

夜が明けたので辺りの景色を見る事が出来るようになってきた。車は、生えている樹木が何故だか全て立ち枯れている景色を横に見る崖道を走っていく。見渡す限り灰色に立ち枯れ、折れた樹木の群れが朝もやに煙って幻想的な風景を造っている。まるでここは樹木の墓場みたいだ。

ああ～!!この風景覚えているよ～!!三年前に見た風景とまるで同じだ。嬉しさがこみ上げてきた。私にはその幻想的な風景がこの世とあの世をつなぐ賽の河原のようなイメージに感じられていた。ここは現世に別れを告げる死の世界。そしてここを通り過ぎると美しい天上の世界に入っていくんだあ... 我ながら感情的すぎると思うが、なんとと言っても亜丁は三年間思い焦がれて美化されてき

た土地なのだ。私は暫し、自分だけの世界に浸って楽しんでた。

「雪山が見えているよ」

しばらく走ったところでドライバーが言った。皆、ハツとして一斉に彼が指差す方向を見る。後ろを振り返ると車のリアウインドー越しに、雲間から顔を出した雪山の頂上が朝日をあびてオレンジ色に輝いているのが見えた。

「きゃー!!!!!!」

思わず隣に座っていたウィンと声を張り上げて抱き合った。

「あれは？」アロンがタクシードライバーに尋ねる。

「仙乃日だ。亜丁三大神山の最高峰さ」

亜丁には真夏でも溶けない雪を頂く神の山と信仰されている三つの雪山があり、その最高峰が標高6032mの仙乃日だ。

「停めて!停めてー!!」

私達は車から飛び降りると朝日に輝く仙乃日を眺めた。朝日に輝く雪山は神々しいほどに美しい。込み上げてくる気持ちを抑えきれずに私は再び叫び声を上げて、シャオチンと抱き合った。アロンとウインは夢中でカメラのシャッターを切っている。そんな私達を眺めていたドライバーの兄さんが笑いながら言った。

「そんなにここが好きなら、この土地の青年と結婚してここに住んだらいいさ。俺はもう結婚したが、俺の弟はまだ独身だ。よかったら紹介するぜ」。

明るいところで改めて見ると、彼はなかなかハンサムで優しそうな好青年だ。きっと弟もハンサムだろう。「紹介して!紹介して!」私が言うと皆が声を上げて笑った。

私達が騒いでいると一緒にゲートを通過した後続車もやってきて車を止め、皆、車から降りてきた。先程は暗かったのが気づかなかったが、その中に理糖から稻城に向かうバスの中で真っ赤なジャージを着込んでいたおじさんを見つけ「バスの中でお会いしましたね」と声をかけると、おじさんも「ああ!あんた後から乗ってきた子だね!」と満面の笑みを浮かべて二人で硬い握手を交わし合った。

その場にいたみんなが、一緒にモグリで入場した共犯者の連帯感と、一緒に美しい美しい風景を見ている連帯感で和やかなムードに包まれていた。

私が長い間思い焦がれて、何日もかけて目指してきた思い出の土地は、もう目の前まで迫ってきていた。

(続く)

韓国ドラマを見ていなかったら、その存在さえも知らなかっただろう、濟州島へ行くこととなった。幹事を引き受けてくれたEが怪我で参加できなくなり、オーストラリア旅行前の多忙なKが有難いことに幹事を引き継ぎ、11月初旬、総勢5名の旅行団は韓国の南の島へと飛び立った。

Jeju国際空港に下り立った私たちを現地の観光会社がロッセホテルまで送ってくれた。舗装された道の両側には、たわわに実る黄金色のミカンとトルハルバン(石じいさん)が私たちを迎えてくれた。韓国では、濟州島でのみ、ミカンの栽培が可能で、島の大きな収入源になっている。幼い頃聞いた「島の権力者によって非時香菓(ときじくのかぐのこのみ)を探しに常世の国に出かけた田道間守(たじまもり)の話」が、ここ濟州島だったと何かの本で読んだ記憶がある。

車は島の南側西帰浦市の中文観光団地、高級ホテルが乱立する一角にあるロッセホテルに到着した。このホテルはNHKで放送された韓国ドラマ“オールイン”のロケ地だ。イ・ビョンホン扮するギャンブラー、キム・イナが裏社会の権力と暴力によって、理不尽に奪われた愛と友情、家族を取り戻す話で、アメリカでのロケはグランドキャニオンの空を爆音激しいヘリがキム・イナの決意と闘志を乗せて飛び、そのスケールの大きさを見せつけた。韓国内でも視聴率はよかったらしい。ソン・ヘギョ扮する薄倖の女性スヨンの育った養護施設も兼ねる教会は、海の見える島の端、今はオールインハウスとしてチェジュドの観光地になっていた。

そのスヨンがこのホテルの火山噴水ショーを企画(ドラマでは)、夜毎、ホテルの空を赤々と焦がしている。ホテル内の庭園には、ベンチにも“オールイン”と刻まれ、せつなく美しいオルゴールの音色とともにストーリーを思い出した。

さて、NHKは'07年12月から、ハイビジョン放送で日本における韓流の立役者ペ・ヨンジュン主演“太王四神記”を放送し始めた。何十億かけて作ったドラマだセットだCGだ、とNHKのコマーシャルで連呼して、日本中のアジュンマは気もそぞろに地上デジタルテレビを買い求め、微笑みの貴公子の広開土王の勇姿に胸をときめかしていることだろう・・・そのドラマのオープンセットが、ここ濟州島にあるのだ。

わがグループも勿論、観光目的地の一つだ。日本語堪能なドライバーさんのタクシーで、その目的地へと出発したのは翌日の朝、生憎の曇り空で肌寒い11月4日だった。ホテルを出て1時間あまり、そのオープンセットは島の北東にあり、ハルラ山を左に見ながら裾野の牧場や山中を抜けてやっと到着した。「イルボンアジュンマ、マニマニソヨ? オブソヨ? (日本人のおばさんは沢山きていますか)」と、聞き取れなかったが切符もぎりの美しいアッガシ(娘さん)には、聞き取れなかったらしい・・・。

西暦391年、高句麗19代永楽大王(広開土王という名は没後の略称)即位、412年に亡くなるまでの21年間を自ら軍勢の先頭に立ち、戦地を駆け巡り、戦に次ぐ戦の中の生涯であった。日本でも「好太王」という名でよく知られている彼の業績は、彼の子である20代長寿王によって現中国吉林省集安に建てられた高さ6.39メートルの広開土王碑で知られている。

ドラマ“太王四神記”は歴史ファンタジーと銘打ち、古朝鮮の神話をモチーフに、前半は即位するまでの葛藤と彼の即位を阻む勢力との戦い、後半は王になってからの愛と内なる敵、また外においては、百済と中国後燕の圧力をはねつけ領土を広げていく・・・といったものであるが高句麗古墳の壁画から玄武・青竜・朱雀・白虎の四神を彼の守り神として配しているのだ。

撮影後のオープンセットは“大長今-チャングム”のときと同様、テーマパークとして、韓流ファンの憧れの地となるのだ。いや、ドライバーのカンさんが「昨日は撮影があって、あちこち入れなかったそうですよ」と言っていたので、撮影中も、こうやってはるか日本からおばさん達がやってくる・・・ドラマはドル箱様々なのだ。“朱蒙”のオープンセットはソウルの南500キロ全羅南道羅州にあり、韓国内外から観光客がやって来ているようだ。一種の町おこしだが、韓国はその内ドラマのテーマパークだらけになること受け合いた。

さて、私たちが迷い込んだ“四神記”の4世紀末の世界は、寒さゆえか、撮影がないせいか人影まばらでゆっくり廻ることができた。広場に置かれた荷車、櫓、遠くの幟旗、どんなシーンが展開するのか思いもつかない。立派な門構えの屋敷に入れば、左右にテーブル、正面に彫刻の施されたルーレット(?), 二階からは、今にも誰かが降りてきそう・・・。狛犬がシーサーか、門を守る動物を思わずなで回したり、小さな川のおしゃれな橋を渡り、遠くには城が見える。いくつもの階段の難所を越えれば、ハリポッター風魔法使いが出てきそうなセットあり。井戸の側には馬小屋かな? あらゆるシーンをうまく撮影するのだなあ・・・と感心したのは、ドラマを見てからだ。市場のシーンはあの広場が・・・、朱雀であるスジニが逃げ回るシーンはあの屋敷が・・・等等。

2007年、ユネスコの世界自然遺産に指定された溶岩洞窟、噴火による独特の風景と植物の宝庫のハルラ山周辺は、新たな観光地として脚光を浴びている。かつて、独立国だった耽羅国が高麗時代に併合され、流刑の地として長くその名を知られたが(ドラマ“大長今” —チャングムでも、艱難辛苦を嘗める主人公に涙する)、近代においても、民衆蜂起の地として、激しい弾圧と圧制を乗り越え、三多島と別名を持つこの島の厳しい自然を克服して、私たちににとっては新たな憧れの地となるだろう。



車内では後部席には若者達が陣取り、中央部には遅しくも優しい奥方達、前部には奥方に頭は上がらないけど陽気で気持ちの良い旦那衆が座ります。僕は唯一の外国人ゲストなのでマンちゃんと一緒に一番前の最上席に並んで座らせてもらいました。前回にも書きましたが最前席は事故の際には一番危ないのでちょっと怖い席です。

バスが動き始めると直ぐに、後部席では若者達がギターやタプラー(スリランカの打楽器)の演奏にあわせて歌や踊りを始めます。中央部では奥方達が大声でお喋りに花を咲かせながら後部席の演奏にあわせて通路で歌ったり踊ったりしています、その合い間にも前方の旦那達の挙動に目を光らせています。そして前の席では奥方の目を盗んで旦那衆がこっそりと酒宴を始めています。

スリランカでは一族の絆が非常に強いので、今回のバス旅行に参加した親戚一同は常日頃から顔を合わせては助け合っている関係なのですが、やはり一緒に旅行に出かけるので気分が高揚しているのでしょう。また、何人かの親戚は遠方に住んでいてこの旅行に合わせて帰省しています。久し振りの再会なので、お互いの近況を報告合っています。皆の浮き浮きとした気持ちが最前列に座っている僕のところまで伝わってきます。

暫らくすると、後方にいた若者達の中でお調子者らしい青年が浮かれた調子で僕達のところまで来て後部席と一緒に遊ぼうと誘います。誘いに来たついでなのか、それが本来の目的なのか母親の目を盗んで、父親達からアラック(スリランカの地酒：椰子の花心から造ります、ラム酒のような香りです)を一口飲ませてもらっています。その後は、男女の若者達が入れ替わり立ち代り誘いに来ては、素早くアラックやビール等を飲んでいきます。皆、母親の目が怖いようです。

幹事たる者は道順を運転手に指示しなくてはいけない、と思い込んでいるマンちゃんを席に残して僕も後部に席を移して遊びに加わることにしました。でも、スムーズに後方に移れる筈はなく、中央付近で奥方達に捕まって日本や僕個人について根掘り葉掘り訊かれたり、お菓子を振舞われたりでなかなか後方に移れません。後方からは手まねで早く来いという合図がくるのですが、奥方達は離してくれません。奥方達と若者達の間ではシンハラ語で何か言い合っているのですが僕には理解できません。理解してたら、どちらかの言う事を聞かなければならない

でしょう。きっと理解できない方が良かったのかもしれないですね。

路線バスのプロドライバーに道順を教える必要なんて無いのに、交差点ごとに、右だ、左だ、直進だと指示するので、運転手に五月蠅がれていたマンちゃんも、後方の賑やかさに誘われて後方に移ってきました。もともと、マンちゃんも移った後でも少し酔っ払った旦那衆が運転手にあれやこれや指示するので、運転手には気の毒でした。

マハラガマから約90kmほどの、ラトナプラ(宝石の産地として有名)の少し先で脇道に入った所にあるお茶畑までの道中ずっと演奏が続き、少しお酒が入って顔色の良くなった旦那衆も奥方に怒られながらも踊りに加わります。

誰かの知り合いがいる町で、その知り合いに挨拶するというのでわざわざ遠回りをしたり、横道に入って停まったり、拳銃の果てには家の場所が判らなくて探したりと、なかなか先に進みません。道端に果物売り等の屋台を見つければ停まって売り子を冷やかしながら車中でのおやつを購入、移動市場が開催されていれば覗くために停まり、誰かが何かを買っています。僕には早く目的地に行って遊べば良いのと思えるのですが、出発地でバスに乗った時点から、皆で一緒に行動できる事がどうしようもなく楽しくて仕方が無いようです。

知り合いの家を探すのも、全員が一生懸命にあっただ、こっただと言ひ合い、通行人に聞いています。漸く家が見つければ全員がバスから降りて、初めて会ったというのにまるで旧知の仲のように挨拶を交わします。僕には羨ましいような感覚です。

主な国道にはドライブイン風の茶店がたくさんあり、トイレ休憩で立ち寄った茶店で、お決まりの甘〜い紅茶とこれもまた甘〜いお菓子を飲み食いしては休憩。僅か100km弱の道のりを4時間もかけて目的地に到着しました。

お茶畑の入り口にバスを駐車し、皆で手分けして荷物を担いでお茶畑の間を登ると広場の様な場所があります。広場の周りには集会用のステージと管理人事務所のような小屋があるだけで他は一面お茶畑です。休日のせいなのか、シーズンのせいなのか、お茶摘みの人は見あたらず管理人夫婦以外には誰もいません。今日は、お茶畑も広場もマンちゃん一族の貸し切りです。

お茶畑での様子は次回に書きます。

(続く)

## ▶ 大連を楽しむ

中国に来て2カ月が経った。10月とえば、日中はかなり暖かいが、朝晩はやや寒くなり、日本の11月下旬頃の気候である。10月1日は「国慶節」で祭日、さらにその前後9月29日(土)から10月7日(日)まであわせて9日間が休みになった。学校や会社などは9日間まるまる休みである。こちらに来てから初めてのまとまった休日、このように長い連休は中国では3つある。国慶節の連休と共に、1月下旬から2月にかけての「春節」と5月はじめの「労働節」で、いずれも1週間ほどが休みになる。最近では5月の労働節を日本と同じように“Golden Week”と呼んでいる。春節の場合、学校は1月15日あたりから2月いっぱい休みになるそうで、1カ月半ほどのずいぶん長い休暇が取れそうなのは驚いた。

国慶節の休みには、今まで大連市内をゆっくり歩く機会がなかったので、毎日のようにあちこちを訪ねてみた。まず前から訪れてみたいと思っていた中山広場の日本統治時代の建築物を見ることとし、早速出かけてみた。写真などでよく目にした建築群であるが、なるほど急変貌する現在の大連の中で、今も昔の建物が残っているのが、この中山広場である。ここはかつて大広場と呼ばれていた。日本の手で建築された大連市役所(現在は中国工商银行)、東洋拓殖大連支店(現・中国実業銀行)、中国銀行(現・中信実業銀行)、横浜正金銀行(現・中国銀行)、関東通信局(現・郵政局)、朝鮮銀行大連支店(現・中国人民銀行)、大連警察署(現・遼寧省対外貿易経済合作庁)、大連ヤマトホテル(現・遼寧賓館)等の建物がそのまま残され、現役で今も使われている。

広場を取り巻くこれらの華麗な建築群は上海のバンドに残る建築群と劣らないほどすばらしいものが残っている。他にも満鉄関係やロシア時代の建物もあちこちにあり、丹念にひとつひとつ見ているだけでも興味が尽きない。

大連で見たいと思っていたもうひとつは「大連京劇団」の京劇である。現在この劇団が使用している建物は戦前に建てられた東本願寺で、その本堂が劇場として使われている。この劇団は日本でも公演したことがあるそうで、ロビーにはその時の写真が掲示されていた。たまたま見に行った日は「麒麟舞台開幕10周年御祝演出劇目」と銘打った公演の初日で、次のような3つの出し物があった。

- ①「洗浮山」(浮山山賊掃蕩記)
- ②「女起解」(女囚を移送)
- ③「小商河」

今回この劇場所属の一級国家演技人である李萍と楊赤<sup>リーピン ヤンチー</sup>は出演していなかったが、彼らに次ぐ楊程と肖迪が出ていて力のある演技を見せてくれた。公演時間は全部合わせて2時間ほどで、どれも大変迫力があり、時間を忘れるほどであった。せりふは舞台脇のボードに逐語訳が出るが、ただ、それらを十分理解できたわけではないので、ストーリーが必ずしもよく分かった訳ではない。それでもうっとりするようなせりふまわしと音楽には十分魅せられたと言ってもいいだろう。

大連には日本企業がかなり進出しており、はっきりとした数字は分からないが、日本人駐在員やその家族等かなりもいるようである。街を歩いても日本人を対象とした様々な施設が目につく。日本総領事館やJAL、全日空が入っている森茂ビルの周辺には日本語で書かれたレストランや飲み屋などの看板がたくさんある一画があり、一瞬日本の街を歩いているような気がした。大連では、「Whenever 大連」、「コンシェルジュ大連」、「Look 大連」、「R's Romantic Street」と言ったような日本人を対象にした情報誌がいくつも出ており、何ら不自由を感じることなく生活が出来そうである。

東京に住む知人の紹介で、大連在住の三上吉彦氏が経営する「琵琶咖啡店」(Pippas Coffee Shop)を訪ねる機会があった。ここは単にコーヒーショップというよりは日本人との交流の場であると言ってもよさそうである。大連在住の日本人はもとより様々な国籍の外国人も、また、もちろん地元の中国人もたくさん訪れている。毎週水曜日の夜には、英語の集まりがあり、そこには多くの人々がやって来る。たまたま私が行った時は国慶節の休みにぶつかったので、あまり来る人は多くなかったようであるが、12、3人ほど来ていた。特別何かを行うという訳ではないが、好きな時に来て、好きな時に帰るといった具合で、4、5人のグルー-プで飲み物を飲みながら自由に話をしていた。会話の練習はもとより、様々な情報交換の場と言ってもよいかも知れない。この日はアメリカ人、カナダ人、中国人、韓国人たちが来ていた。同じように日曜日は日本語を話す集まりがあるそうである。今後時間があればこちらにも出てみたいと思う。

大連に行かれる機会のある方でもし興味があるようでしたら、ぜひこの「琵琶咖啡店」を訪れてみては如何でしょうか。観光旅行では得られない生の中国や大連の情報を得ることが出来るかも知れない。アドレスと電話番号は次の通りである。

アドレス：大連市沙河区黒石礁44号-5

電話：0411-88122144

ホームページ：www.threweb.ad.jp/logos/china/



## ▶ ショッピングモール&テレビ

こちらに来て3ヶ月が過ぎた。毎日の生活から気がついたことをいくつか書いてみたいと思う。私が勤務している学校は大連市内からかなり離れていて、莊河市というところにある。しかし、行政的には大連市に属している。人口は約90万人で、町田の2倍ほどである。街の商業規模などを見てみると、中心部に一極集中的にあるだけで、町田のようにあちこちに大きなショッピングセンターがあつたというわけでない。従って何か買い物となると毎回同じところに行くことになり、同じようなものを買うことになる。

ここには「新天地」というショッピングモールがあり、ここを中心にして周辺にデパート、レストラン、劇場、商店がたくさんある。私の場合、買物はこの「新天地」でもっぱらしており、この中にはスーパーマーケット、中国製ブランド衣料品店、食堂街、電気製品販売店、カメラショップ、ケンタッキーフライドチキン等があり、ここだけで日用品はすべてそろってしまう。周辺の商店と比べるとここは値段が少々割高であるが、品質がいいので、安心して買うことができる。

スーパーマーケット以外では、値引きも可能であり、こちらの人と一緒に買い物をすると、私に代わって値引きを求め、しかも要求する値引きの割合も大きいのは驚いた。私ならば10パーセントも割引してくれるならば、もうそれだけで十分だと思うが、彼らのやり方は30～40パーセント位平気で値引きを求める。見ていると、その駆け引きが大変激しく、どちらが買い物をしているのかわからないくらいである。若い女性でもその値引き交渉は壮観である。商店によっては商品に値段がついていなくて、外国人となるとかなりふっかけることがあり、ディスカウントを求めても応じてくれない。その点「新天地」では、どこも値札がついているので、困ることはない。

冬が近づくに連れて、街中ではサンザシの冰糖葫芦売りや焼き芋屋がよく見られるようになった。これらはいわば冬の風物詩とも言えそうである。サンザシの冰糖葫芦売りは自転車の後部にサンザシを立てて売り歩き、一方、焼き芋屋はリヤカーを改造して、荷台にドラム缶を乗せ、その中に火をおこし、さつま芋を焼いている。サンザシは1本1円で売られている。焼き芋はまだ買ったことがないので、値段はわからない。

毎日見ているテレビに関して、レポートしてみたい。中国のテレビ放送は言葉が分からなくても十分楽しむことができる。しかも、チャンネル数がたくさんあり、日本にはないチャンネルとして京劇専門、クラシック音楽専門、報道ニュース専門、児童向けそして英語専門のチャンネルがあり、児童向け放送を除いて毎日12時過ぎまで

放送している。もちろん日本でもCSテレビでは報道専門や音楽専門のチャンネルはあるが、こちらは有料番組ではなく、無料で普通に見ることが出来る。

夜のゴールデンアワーとも言える7～9時台の番組では毎日のように日中戦争時代を題材にした歴史ドラマが放映されていて、それには必ず日本人の軍人が出てくる。彼らは中国人俳優が演じているが、もちろんせりふは中国語で、時々片言の日本語が出てくる。以前は「日本鬼子」と言われるような、極端で、しかも残忍なイメージの俳優が多く見られたが、最近はあまりそのような例は見られないようだ。しかし、ある時日本人をイメージした女性が出ているドラマを見たが、着物の着方といい髪型といい全くおかしな姿をしているのには驚いた。最近中国の映画やテレビで活躍している日本人俳優がいる。名前は分からないが、かなり人気があるようである。日本のテレビで彼の活躍を伝える番組を見たことがある。

学校の寮では日本のNHK WORLDと韓国語放送を見ることが出来る。NHK WORLDは特別海外向け放送で、対象は海外在住の日本人と全世界に向けて放送している。全放送の3分の1は英語によるものである。はっきり言って大半はあまりにも教育番組的で、面白くない。ニュースや日本文化の紹介番組のような興味ある番組もいくつかあるが、大半はつまらない。大きなホテルなどで見られるNHK放送はNHK WORLDとは異なり、BS放送である。日本とは1時間遅れであるが、そのまま見ることが出来る。NHK WORLDと比べると、韓国語放送は全く対照的である。時々見ることがあるが、こちらはバラエティ番組や歌番組、ドラマなど娯楽番組がたくさんあり、見るだけでも面白い。ただ言葉は全く分からない。

テレビ番組には全国放送のCCTVと地元放送がある。前者は1チャンネルから10チャンネルまでである。最近知人に教えられて、金曜日と土曜日の3チャンネルで夜7時半から8時半まで放映される「週末喜相一笑星大聯盟」という番組を好んで見ている。日本のバラエティ番組と同じような感じであるが、ただ日本の番組のようなあくどさや軽薄さが無いのがよい。毎回さまざまなゲストが登場し、コントあり、マジックあり、歌あり、相声(中国漫才)ありで、大いに楽しむことができる。

最近地元の大連電視台1チャンネルで、日曜日午後3時から30分間日本語番組があるのに気がついた。二人のアナウンサー(一人は中国人、もう一人は日本人)がニュースや取材等で日本との関わりを地元密着で伝える、なかなか面白い番組である。大連には日本の企業がかなり進出しており、在住日本人も多いのでこのような番組もあるのだろうと思う。

2000年に、NPO法人として認可された「チベット高原初等教育・建設基金会・ゲーサンメド」(理事長・烏里烏沙氏)の第一校目の曲登ゲーサンメド小学校が、中国四川省甘孜チベット自治州理塘県曲登に本格的なチベット建築様式で建設された折(2003年9月～2005年10月)、建築を志す若い日本人監督として現地入りし、建築の指導をしてきた鈴木晋作さんによる再訪の報告です。尚、鈴木晋作さんは、チベットでの学校を完成後、'わんりい'でも紹介の、ラオス・山の子ども文庫基金(代表・安井清子氏)によるラオスの山の図書館建設(2007年3月竣工)でも現地入りし、ラオスの村人と共に図書館の建設に携わりました。

## ●四川省甘孜チベット自治州理塘県曲登

理塘県は、成都からは700キロ、州府の康定からは300キロ、県内の最低標高は2680メートルで、最高標高は6204メートルです。そのうちのほとんどの地域の標高は3600メートル～4600メートル。大半の家庭の生計は純畜牧業に依る。曲登郷は理塘県のなかでもっとも環境の厳しいところであり、小学校所在地の標高は4300メートル。俗に「地球最後の遊牧集落」と言われているが、その遊牧生活も例に漏れず、現代化の影響を受けている。

## ■発展する理塘の街と曲登郷

今回、NPO法人チベット高原初等教育建設基金会の小学校建設団が涼山イ族自治州での活動を終えて、カンゼチベット族自治州九龍県から成都とチベット自治区を繋ぐ川蔵公路に合流し、理塘を目指しました。

今回の訪問の目的は、基金会の援助活動で建設された曲登郷ゲーサンメド小学校の校舎の状態を点検することと、小学校で継続して交流することでした。長い旅路を経て、理塘に着いた時は、辺りは真っ暗でした。2004年に建設の現地担当となって以来、私は頻繁に理塘に入っていました。今回は一年半ぶりの訪問でした。街の手前の峠から見下ろすと草原の方へ街灯、家の明かりが延びており、遠くからでも、街が拡大していることが分かります。翌朝起きて街を歩くにつけ、道路はきれいになり、近代的なガソリンステーションができ、草原に向って集合住宅も増設され、理塘の目覚ましい変化が見られます。もちろん、知人が結婚したり、商売を鞍替えしたりと普通の暮らしの中での変化もあります。ただ今回の滞在では、それ以上に「発展」と言う名の経済、インフラの変化の潮流に、人々の生活が取り巻かれていることが実感されました。

## ■理塘の街にて、曲登行きの車を探して

理塘から曲登郷行きに際しては、車の調達に苦労しました。というのは送迎を当てにしていたザシ書記とヨントオ先生も多忙で、我々で車を探さねばなりませんでした。

街中で困っていると、通りの向こうから歩いてくる、14、5歳の少年がぼくを見つけて「鈴木(リンムー)老

師!」叫びました。私は、彼の顔を一瞥して、首を傾げましたが、ふとある絵を思い出し、記憶の中にある小学生と今の精悍な姿の彼が同一人物であることを認識できました。

2年前に催した曲登小のグラウンドでの写生大会の時、彼が大きく描いたパンダの絵がとても印象的だったので。彼は曲登ゲーサンメド小学校の5年生(新6年生)です。私は、この通りがかりの少年を良き相棒として、車探しを続けました。

結局は、ザシ書記と郷役場の幹部が遠隔からあれこれ手配してくれ、翌朝は無事に出発することが出来ました。なお出発前夜は、建設団が持参した小学校に寄贈する絵本などに中国語の題名を入れて、準備しました。

## ■到着

我々の総勢12名とチベット人運転手2名は、2台の車にぎゅうぎゅう詰めになり、以前とは格段に良くなった「悪路」を越え、曲登郷を目指しました。

郷の中心に着くと、ザシ書記が県政府との会議の合間を利用して出迎えてくれ、街まで迎えに来られなかったことを丁寧に謝し、多くの人々と共に、我々の訪問を歓迎してくれました。彼は、近年の村の発展を説明し、教育の事情の困難さも付け加えました。

県・郷政府の政策としては、遊牧民が郷中心に住むことを奨励し、道路、住宅環境を整えて、遊牧生活の保持と、近代的な集住生活の実現を図っていると言います。そして、そのことが安定した教育環境の整備にも繋がるとの考えです。

郷中心では「新村」を建設し、以前に比べて石積み住



宅の戸数が増え一大集落を形成しています。お寺に続く目抜き通りを、アスファルト舗装にするというので地面を整地し側溝を作っています。

小学校は、もはや曲登郷の建物の一群の一つでしかありません。この「発展」を誰が予想したでしょうか。ホンの三年ほど前の当時、一年でも早く小学校を作りたいという基金会の人々の多くの意志と現地政府、地元の人々の協力によって、暗中模索の中で2004年に新校舎が建設されました。

ここで長期滞在を通した私見ですが、もし一年でも開校が遅れていれば、小学校と言う存在が地域の中で定着する前に、遊牧生活が現代化の荒波に揉まれて、「遊牧地の中心学校」という役割は曖昧になり、教育に対する地域の意識が希薄になったのではないかと思います。今でも、遊牧、商売、家の仕事が多くて子どもは「学校どころではない」という家庭は多いのです。生活の問題であり、教育についての意識の問題であり、郷政府と曲登小の先生たちがずっと取り組んできた課題です。

校舎の状態に関しては、大方良好と言えます。チベット式の土の屋上は、丁寧に補修されて大事にされている様子が分かります。チベット建築では、その建物全体が良く手入れされているかどうか、推測できる箇所がいくつかあるのです。

一方、損傷を受けている箇所がいくつかありました。それらは校舎本体でなく、第一期工事で建設されたコンクリートブロック塀が一部倒壊の恐れがあることと、第三期工事で施工されたグラウンドが凍害を受け、コンクリート面が割れて一部剥離している事です。これには、曲登郷政府が予算をつけて、自己補修する予定です。

### ■新しい出会いと再会

我々が小学校に到着すると、夏期休業にも関わらず、周辺の子も達が集まってきました。私にとっては、懐かしい顔がたくさんあります。初めて訪れた人々にとっても、満面の笑顔の人懐っこい子ども達はチベットとの絶好の出会いとなったでしょう。我々はついつい、興奮で時間と高山病も忘れて、子ども達と遊びました。しばらくして、数人の方が、高山病で苦しむことになるのですが…。

さて、学校ではいつものように円になって合唱会が行われました。旧教室棟と新教室棟との間のいわば「中庭」というべき空間です。30名弱にはちょうどいい空間です。

### ■先生との談話

小学校を総括している曲登出身のヨントォ先生が学

校の変化を話してくれました。彼がいてくれるので、学生の生活環境や校舎の維持管理に関しても安心できるのです。

それに対し、私の質問があまりに校舎のことや新集落のことばかりに集中するので、彼は、少し憤慨して、「校舎や新しい村ばかりを見てどうするんだ。学生達がここで何を勉強し、何を身につけたかを日本のあなた方は知るべきではないか。」と私を諭しました。

彼が「授業を見て欲しい」と言うので、「じゃあ、臨時授業を始めてくれるかい？」という我々の提案に応じ、チベット語、中国語、日本語を織り交ぜて交流授業となりました。

文字の読み書きの練習での子ども達の元気さ、絵描きや折り紙を始めたなら止まらない集中力に驚きました。本当ならば、もう少し時間を取りたいところでしたが、気が付けば傾きかけた陽が別れの時を知らせていました。

### ■建設は交流があつてこそ

理塘では、物価の高騰が激しく、商売をしている連中は、その恩恵に与って、にわか景気に浮かれています。物価は1.5倍から2倍に上昇したと言えるでしょう。中国全体の好景気と理塘で採取される漢方薬の出来高が今年は特に高いことが原因であることは明らかです。

普通の暮らしをしている人々にとっては、家計に直撃したまっただけではありません。家計の苦しい家庭では、わずかばかりのお金のために、子どもが中学校にも通えず働きに出ざるを得ません。病気でもしようなら、医療費はいったいどうやって払えるのでしょうか。これが、好景気の裏側です。

基金会の活動にも転機に訪れているのではないのでしょうか。もともとは経済的支援でチベットの人々と作り上げた小学校ですが、この小学校が、日本と中国の最奥地のチベット高原、遠隔地に住む両者が長く長く交流する場となれば将来的にもなんと素晴らしいことでしょう。我々の都合で訪ねるといつも夏休みと重なってしまうので、是非とも平常授業時のにぎやかな時に交流授業を試みたいものです。

二校目のイ族の小学校建設を目前に、小学校は何の為に建てるのか、建てた後はどうかかわるのか、私も自問した意義ある訪問でした。

また、今回故郷に帰ったような懐かしさを覚え、彼の地で「現場担当」にあたるのコツは、気長に自分の「第二の故郷」を作ることにあるとも思えたことです。

## 松本杏花さんの俳句「余情残心」より

波しぶき鷗逆らふ寒の風

bōtāo juǎn xuě duī  
波涛卷雪堆  
hǎiōu nǐfēng zhǎnchì fēi  
海鸥逆风展翅飞  
lǐnliè hánfēng chuī  
凛冽寒风吹

季语：寒风，冬。

赏析：读罢此句，不由自主地想起了高尔基的《海燕》。海鸥迎着凛冽的寒风奋飞，下面就是拍岸的即惊涛，这是何等的险峻啊！是鸟，就要飞；就有坠落的危险。相信这海鸥起飞前就不危惧汹涌的巨浪，不危惧冰冷的寒风，否则，它就不到空中翱翔了。

笔者认为此首不单单是写生句，而有励志成分潜藏其中。

水仙の斜面に家のへばりつく

xiāng jué shuǐxiānhuā  
香绝水仙花  
mǎn bō shèngkāi sù tǐ xié  
满波盛开素体斜  
yī fù yī rén jiā  
依附一人家

季语：水仙花，冬

赏析：我国大都将水仙花置于浅钵中在室内观赏，而日本到有不少栽植在室外的水仙花。笔者曾在伊豆半岛见好多地方都有种植在室外的水仙花。

此句为写生句，流露出作者对这仙境般的人家的浓厚兴趣。水仙花色泽不艳，但气味香馨，神韵幽雅，堪为文人骚客咏叹的对象。

## アフリカとの出会い (22) ケニア独立記念日

竹田 悦子 アフリカン・コネクション代表

12月12日、ケニアの44回目の独立記念日をお祝いする「ジャムフリ・デイ」が、東京タワーの目の前に臨むプリンスパークタワー東京ホテルで開催されました。

日本に住むケニア人は、700名以上いて日本にいるアフリカ人の中でもナイジェリア、ガーナに続き第3位を占め、なるほど多くのケニアの人がいるんだと、会場の盛況ぶりを見て感心しました。会場には、ケニア人、その家族、ケニア大使、大使館員、国会議員、ダンサー、シンガーなど1000名以上はいると思われ、普段は離れているケニア人同士が一堂に会する機会ということで、自己紹介やお互いの話は尽きることなく、8時半のお開きの時間になっても、熱気は冷めることなく、いつまでもいろんな人々との交流がありました。

私がこの集まりに始めて参加してから3年目。その度に、いろいろなケニア人とお友達になれますが、中でも日本人でアフリカに関わる仕事、活動をしている人々との出会いはとても貴重な機会となっています。まだまだマイナー

な地域としてのアフリカを、愛し、尊敬し、関わってこうという姿勢、アフリカの問題を自分たちの問題として捉える問題意識の高さ、私は大いに毎年励まされています。

また会場で振舞われていた料理は、ケニアからこの日のために来日したシェフに用意され本格的なケニア料理。ケニアのビール。ケニアの音楽。ここが東京の真ん中であることも忘れ、アフリカを感じた夜でした。

皆さん、昨年も「アフリカの日々」を読んで下さってありがとうございました。年末年始なにかとお忙しいとは思いますが、アフリカに関する映画もいろいろ新しく出ていますので、この機会に是非見て頂きたいなと思い、ご紹介させて頂きます。

「ブラッド・ダイヤモンド」「キング・オブ・スコットランド」「ホテル・ルワンダ」の3作品です。いずれもアフリカの問題を鋭く描きつつ、引き込まれるストーリー展開、映像の迫力で全く飽きずに見れる作品です。では、来年もよろしく願い致します。



‘わりい’の2月号の発行はありません。皆様のよいお年を祈念しています。

‘わりい’1月の定例会：1月16日(水)田井宅 13:30より



**【活動報告】‘わんりい’15周年記念コンサート  
「二胡、琵琶、揚琴と笙の演奏会」  
2007年11月30日(金) 19:00～20:45  
於：町田市民フォーラム3F/ホール**

久し振りの中国民族音楽演奏会は、町田をベースに海外支援活動を続けている4団体と会員の皆様のご協力で、188席の小さな会場ながらチケットは一週間前には販売を完了。15周年記念コンサートに相応しく盛会でした。

二胡・中国琵琶・揚琴・笙の中国民族音楽演奏者の皆さんは、本物のよさを知ってその国への理解を深めて欲しいという‘わんりい’の活動を、会の活動開始当初から理解し応えてくださった方々で、それぞれ在日時間も長く、この間日本をベースに内外で活躍をしていらっしゃるだけに、流石の鍛え上げられた素晴らしい演奏は来場の方々の深い感動を呼びました。3人に1人の方がお寄せくださったアンケートの殆どの方が‘とてもよかった’と評価下さり、又参加したいと答えてくださいました。嬉しいことです。(田井)

**【アンケートの感想から】**

66名(メールで5名を含む)の方々から感想を頂きました。その1部を転載します。

- ◆…はじめて聞く演奏で、大変感動いたしました。中国の人々の元気を今まで感じていましたが、中国民族音楽にも同じたくましさを感じました。本当に実力のある皆様方の演奏をお聞きすることができて感謝しています。
- ◆…久し振りに友人に誘われて来ましたが、とても素晴らしく、また、懐かしく聴きました。…
- ◆…最初の曲から圧倒され、演奏をのめり込む様に聞きほ

ました…

- ◆…中国楽曲の演奏会は初めて聴きました。想像していたより音色が素敵でした…
- ◆…テレビやCDで聴くのととはまったく違う、生の演奏を聴かせていただき、充実した時間を過ごすことができました…
- ◆…とても感動しました。今後もこのような催しを企画希望致します。中国の民族歌謡も希望いたします。
- ◆…二胡は、さまざまな音色が本当に素晴らしいと思いました。このような演奏会を是非又やっていただけたら…
- ◆…第一線で活躍されている各演奏者の演奏は素晴らしかったです。本当に嬉しい一夜でした。
- ◆…私が一番驚いたのは笙でした。中国の笙がこんなにも力強い音色でしかもメロディをずーっと演奏するものだとは思わなかったものですから…

**【“わんりい”15周年記念コンサート・アンケート】**

参加者 175名 回収総数 66枚

- I. 中国民族音楽演奏会に参加されたことがありますか。  
①ある：35 ②ない：30 無回答：1
- II. 今日の演奏会は  
①とても良かった：58 ②良かった：7 ③まあまあ：0 無回答：1
- III. 中国民族音楽演奏会に又参加したいですか。  
①ぜひ参加したい：35 ②参加したい：31 ③いいえ：0
- IV. 中国民族楽器について知る講座に  
①ぜひ参加したい：10 ②参加したい：32 ③いいえ：10  
⑥無回答：14
- V. 中国民族楽器で興味をお持ちの楽器は?(複数回答可)  
①二胡：47 ②琵琶：38 ③揚琴：30 ④笙：16  
⑤笛子：5 ⑥古箏：10 ⑦古琴：9 ⑧打楽器：10  
⑨三弦：5 ⑩月琴：7 ⑪その他、全部：2、石箏：1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’の皆様

Wish You All the Best in 2008



Kenzo Okawa

World Nature Inheritance Four Girls Mountains Nature Reserve

三姉妹演奏会

【中国民族楽器 二胡・琵琶・揚琴の饗宴】

2008年2月10日(日) 18:30開演(18:00開場)

於：サントリーホール・ブルーローズ(小ホール)  
(南北線・六本木一丁目駅(3番出口) 徒歩5分/銀座線・南北線・溜池山王駅(13番出口) 徒歩10分)

- ・出演：劉鋒(二胡) 成燕娟(揚琴) ウェイウェイ(琵琶) 三界晶子(ピアノ)
- ・作曲・編曲・音楽監督：金士友
- ・演奏曲目：生命の地平線/雪祭/茉莉花/蘇武牧羊葡萄熟了的時節/梁山伯与祝英台/三門峽暢想曲 他
- ・主催：Office Riu
- ・後援：中国大使館・文化部
- ・申込み&問合せ：

TEL/FAX：03-3576-1768 (Office Riu矢野)

HAKUJU HALL シリーズ6

【中国の楽器・その音の広がり その6】

費堅蓉一心ゆるがす大三弦

世界で唯一の、あらゆる撥弦楽器(弦を弾く楽器)の名手費堅蓉。費堅蓉自作自演の新曲、津軽三味線とのセッションもお楽しみに。

- ・日時：08年2月3日(日) 14:00開演(13:30開場)
- ・於：HAUJU HALL(小田急線「代々木八幡」または東京メトロ千代田線「代々木公園」より徒歩5分)
- ・料金：全席指定 ¥5,000(前売り) ¥5,500(当日)
- ・出演：費堅蓉(大三弦・中阮)・小林健作(中阮・ギター) 馬平(打楽器)
- ・ゲスト：賈鵬芳(二胡) 佐藤通弘(津軽三味線)
- ・主催・企画・制作：ラサ企画
- ・後援：中国大使館文化部/日中文化交流協会/(社)日中友好協会/(財)日中友好会館
- ・問合せ&予約：ラサ企画 TEL/FAX 03-5748-3040

中国語で歌おう！ 1月指導曲

xī ng  
星

原作詞：谷村新司  
訳詞者：不詳

zhènzhèn kuángfēng chuī guò yīpiàn huāngyě  
阵阵狂风吹过一片荒野

biàndì shì níng fāngxiāng pàn bùmíng  
遍地是泥泞方向判不明

zhǐshì mǎntiān xīngxīng jìjìng zhào zhe wǒ  
只是满天星星寂静照着我

gěi wǒ pòsuì de xīn dài lái guāngmíng  
给我破碎的心带来光明

a xīngguāng càn lǎn  
啊星光灿烂

bàn wǒ dú xíng gěi wǒ guāngmíng  
伴我独行、给我光明

a xīngguāng yǐnlù  
啊星光引路

nǎpà dàolù qíqū bùpíng  
哪怕道路崎岖不平

dàizhe lǐxiǎng wǒ yào zhuī qiú wǒ xīnzhōng de mèng  
带着理想、我要追求我心中的梦

dàizhe lǐxiǎng gēnsuí zhe càn lǎn de xīng  
带着理想、跟随着灿烂的星

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。使用済み古切手も、沢山集まれば、1kg 単位で現金化することができ支援金として使用されるとのことです。

小さくて軽い切手を1kg 集めるには多くの方の協力が必要です。'わんりい'の会事務局も、古切手収集の窓口として協力しています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cm ほど残して切り取り、おついでに折に'わんりい'の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

今年も美味しいシュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)がみんなを待っている！！

!!! 'わんりい' 新年会へようこそ !!!

於：麻生市民館・料理室(小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内)

2007年1月27日(日) 11:00 ~ 14:00

- 定員：40名 ('わんりい' 会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- 参加費：1500円
- 申込：メールかTEL/FAXで。 Email: wanli@jcom.home.ne.jp  
TEL/FAX: 042-734-5100
- 新年会メニュー：1.ほっこり美味しい「羊肉のしゃぶしゃぶ」囲んで歓談  
2.ビンゴ 3.お笑い福引 4.他

・今年の新年会の歌は「昴」です。

「中国語で歌おう！会」(1月18日、まちだ中央公民館・音楽室1)で

中国語「昴」を練習します。是非、お出掛けを！(体験無料)



剪紙カット・ねずみ 高風蓮